

研究課題 (テーマ)		ユマニチュードの「触れる」技術における上肢の使い方の特徴	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部 看護学科	助教	矢野正晃
	看護学部 看護学科	准教授	林静子
	看護学部 看護学科	教授	岡本恵里
研究結果の概要			
<p>【背景・目的】</p> <p>初学者である看護学生には、手掌全体を広く使って患者の身体を支える技術を指導しているが、実際には患者の身体を「指を使って上からつかむ」動作を行う場面が多くみられる。手掌全体を使って患者の身体に触れる場合、指先から手掌の使い方だけを意識するのではなく、上半身全体の使い方を意識する必要があるのではないかと考えた。そこで本研究では、直接患者の身体に触れる際の、熟練者と初学者の肩甲骨を含む上肢の動作分析を行い、「触れる」技術の特徴を明らかにすることを目的とした。「触れる」技術の特徴を明らかにし、学生への教育に活かしていく。</p> <p>令和3年度はプレテストを行い、実験機材の配置・設定、関節可動域測定方法を検討した。</p> <p>【対象】 看護師資格を持つ看護学教員2名</p> <p>【方法】 1) 実験機材の配置や設定の検討 2) 関節可動域測定方法の検討</p> <p>【結果】</p> <p>1) 実験機材の配置や設定の検討</p> <p>動作毎に関節の可動域を正面から捉えることができるカメラ配置を調整し、図1の4か所に設定した。</p> <p>2) 関節可動域測定方法の検討</p> <p>右ベッドサイドに立つ対象者が、模擬人形に対し①枕の位置移動(近位方向)、②患者の両上肢を腹部の上に乗せる、③患者の右下肢を左下肢の上に乗せる動作を撮影した。撮影した映像は映像分析ソフト(ダートフィッシュ・ソフトウェア 365)を活用し分析を行い、下記の関節可動域の角度を測定できることが確認できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カメラ1(左側) 2(右側)：肩の屈曲・伸展、肘の屈曲・伸展 ・カメラ3：肩甲骨の挙上・引き下げ、肩の内転・外転 ・カメラ4：肩甲骨の屈曲・伸展、肩の外旋・内旋 <p>カメラ4については、俯瞰視点であり、被験者の動作中の姿勢により関節を正面で捉えることができず、角度を測定できない時間があった。</p>			
今後の展開			
<p>映像分析ソフト(ダートフィッシュ・ソフトウェア 365)を用いて、関節可動域の角度を測定することは可能であった。しかし本研究では動作中の角度を測定するため、撮影は胸腰部の屈曲・伸展等の姿勢を考慮する必要がある。カメラ1.2.3は側面及び正面からの撮影であり、姿勢の影響を受けることはない。一方、カメラ4は俯瞰視点であり、1台のカメラでは姿勢の変化に対応することができないため、複数台で撮影することが課題となる。今後は、姿勢の変化に対応できるように俯瞰視点用のカメラを増設し、新型コロナウイルス感染の拡大に伴う行動制限が緩和した時点で、熟練者と初学者を対象に本実験を実施する。研究データの分析を進め、学会発表、論文投稿を行う。</p>			

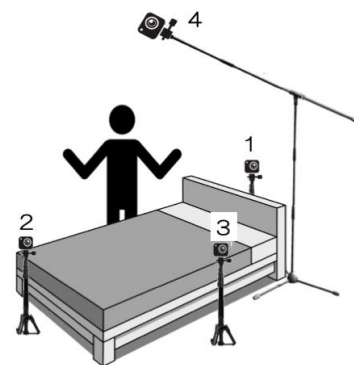


図1 模擬病室のイメージ